

ては、今は触れないこととする。

- (7) 東書「新編古典B」精選古典B古文編漢文編、「三省堂」高等学校古典B古文編漢文編、「精選古典B」、大修館「古典古文編漢文編」「精選古典」「新編古典」、教研「古典B古文編／漢文編、明治」「精選古典B古文編・漢文編」、筑摩「古典B」、第一「高等学校古典B古文編・漢文編」「高等学校標準古典B」、桐原「探求古典B」「古典B」、教出「古典文学選古典A」。なお「国語総合」での採録はなかった。
- (8) 本稿における『大和物語』の本文及び頁数は小学館「新編日本古典文学全集竹取物語伊勢物語大和物語平中物語」による。なお、『新全集』本の底本は、天福本である。
- (9) 東書「精選古典B古文編漢文編」、三省堂「高等学校古典B古文編漢文編」「精選古典B」、大修館「古典古文編漢文編」、筑摩「古典B」、教出「古典B古文編」。
- (10) 第一「高等学校標準古典B」「高等学校標準古典A」。代表著者は、伊井春樹氏と富永一登氏である。
- (11) 拙稿「うつは物語の教材価値」(「宇部工業高等専門学校研究報告」第五十九号 平成25年3月)
- (12) 大修館「古典古文編漢文編」「精選古典」「新編古典」、右文「新編古典」、三省堂「高等学校国語総合現代文編古典編」「精選国語総合」、教出「国語総合」、筑摩「精選国語総合現代文編・古典編」「国語総合」、第一「高等学校新訂国語総合現代文編古典編」「高等学校国語総合」。
- (13) 教出「古典B古文編」、筑摩「古典B」。
- (14) 第一「高等学校古典B古文編・漢文編」。
- (15) 鈴木紀子氏「『浜松中納言物語』―親子愛に見る特性―」(「橘女子大学研究紀要」第十四号 昭和62年12月)

※本稿は、二〇一三年度科学研究費補助金(基盤研究(C)・課題番号…二四五三二二二五)による成果の一部である。

おわりに

『浜松中納言物語』の特徴と、それに即した教材化のありかたについて述べてきた。

前にも挙げた『無名草子』は、「『みつ』の浜松」（『浜松』）こそ、『寢覚』『狭衣』ばかりの世のおぼえはなかめれど、言葉遣ひ・有様をはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとならばかくこそ思ひ寄るべけれ、とおほゆるものにて侍れ。（七四頁）と述べている。表現、内容、情趣に亘り、ほぼ手放しの絶賛と言って良いだろう。

そもそも、俊成女ら鎌倉期の読者に「すべて物語を作るとならばかくこそ思ひ寄るべけれ」とまで思わせていた作品、それが『浜松』なのである。その上、ここまで見てきたとおり、高校現場における有用性も十分兼ね備えてもいる。これを授業に活用しない手はないと思うのだ。私たち指導者は、『浜松』の持つ教材価値にもっと注目すべきなのである。

〔注〕

- (1) 伊藤守幸氏「『浜松中納言物語』と『更級日記』の交錯する旅路」（『平安後期物語』翰林書房 平成24年3月）
- (2) 池田利夫氏「解説」（『新編日本古典文学全集浜松中納言物語』小学館 平成13年4月）
- (3) 小学館『新全集』本による。以下、本稿における『浜松』の本文及び頁数も『新全集』本に基づく。なお、『新全集』本の底本は、巻一三四が榊原家旧蔵本、巻二が鶴見大学図書館蔵祖形本、巻五が浅野家旧蔵本である。
- (4) 本稿における『無名草子』の本文及び頁数は新潮社『新潮日本古典集成無名草子』による。なお、『集成』本の底本は、群書類従本である。
- (5) 三角洋一氏「『狭衣』『寢覚』『浜松』をめぐって」（『王朝物語の展開』若草書房 平成12年9月）
- (6) 無論、「②唐后が異父姉妹吉野姫君の娘として生まれ変わる」展開において、「作者固有」の「物語の方法」を支える力については、別に改めて定位しなければならぬだろう。また、八島由香氏は「『浜松中納言物語』における〈不孝〉——中納言が抱く「罪」の意識との関わりから——」（駒沢大学大学院国文学会論輯 第三十一号 平成15年6月）において、中納言の「父宮」への「孝養」が、反面、日本に残された母への〈不孝〉でもあることを指摘しておられる。重要な観点であり、更に考察されるべきと思うが、物語場面を限定した上で、高校教材としての有用性の抽出を急ぐ本稿におい

は、今の自分を支え来たところについて、改めて思いを致し、今後の自分がいかにあるべきか、考える機会が必要だと思ふのである。具体的な指導においては、国語表現領域への発展性が容易に推察される。音声言語表現を前提としたグループワークを挟み、各自の思考の深まりを確認すべく文字言語表現へと展開させる方法が効率的だろう。状況によっては、更に他作品と組み合わせ、「親子愛」を軸に据えた単元学習としてプランニングしても良いだろう。これは、新学習指導要領の、例えば「古典B」、「内容」(2)イ「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること。」に有効に沿う実践例になろう。

あるいは、『更級』の授業後、同様にA～Dを投げ込んで良い。教科書では、作者菅原孝標女が、物語に強くあこがれる場面を掲載している。また、「はじめに」でも触れたとおり、孝標女が『浜松』の作者である可能性は極めて高い。それならば、当然ながら、物語にあこがれ耽溺した孝標女が、今度はそれに習って創作してみた作品、いわば、孝標女の物語享受の結晶として『浜松』を捉えることができよう。つまり、『浜

松』は、孝標女という物語の読者が、一転、物語の作者という生き方を切り拓く姿を物語る「物語」でもあるわけだ。『更級』と併せ、孝標女が、先行物語に何を学び、また何を学ばなかったか、あるいは、いかなる「世界観」や人生観を育てていったか等、様々な観点からアプローチが可能であろう。考察が必然的に「生き方」に及ぶため、前にも触れたとおり、今後の自分のありかたに思いを致すべき高校生にとっては、極めて有用である。自身の「あこがれ」と今後の「生き方」について、孝標女のそれらと引き比べつつ、思索を深める好機になろう。指導に際しては、同様に国語表現領域と繋げ、グループで話し合いをさせつつ各自の意見をまとめさせるのが効果的だろう。これも単元学習としてプランニングすべきである。さしずめ「孝標女の生き方と物語」といった単元テーマになろうか。新学習指導要領の「古典B」、「内容」(2)ウ「古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠にして話し合うこと。」の良い実践例になるだろう。

う。それら多数の作品と比較したとき、それでもこの『浜松』の「親子愛」は特異に目立っていないだろうか。例えば、『大和』の「子の愛が親を遺棄から救う」ありかたや、『源氏』の「娘ととつての輝かしい将来」のため「子別れ」を選ぶありかたは、「高校生の現実」から十分想像しうる範囲内の「親子愛」の「かたち」に映らないか。対して『浜松』の「転生」は、「親子愛」を「描ききる」かたち」として、その明快さ、規模の大きさにおいて、群を抜いているように思うのである。他作品の「親子愛」が弱いと言っているのではない。他作品も、それぞれ親子の情愛の現実をしみじみ看取させるものばかりである。しかし、親子いずれもの深い情愛が、例えば前のA-Dのとおり、それぞれ明白な描写として描かれる点、またそれゆえ「荒唐無稽」に見える「転生」の必然化が裏打ちされる点、そして「転生」すらが現実的に受容されるものとして物語内に位置を占める点において、やはり『浜松』の描く「親子愛」は、他作品以上に際立って強いと思うのである。『浜松』が「何よりも親子の愛の諸相を語った物語」と定位される¹⁵ゆえんであろう。

そこで、この『浜松』を高校の授業に用いてみては

どうかと思うのだ。子を愛するがゆえに極楽往生よりも生まれ変わっての再会を選ぶ親のありかた、また、親を愛するがゆえに生まれ変わりを信じ危険や困難を厭わない子のありかた。これらは、確かに高校生の現実からは乖離していよう。しかし、だからこそ、そこまでできる親の愛と子の愛について、想像を絶するがゆえの衝撃とともに、改めて深く思索する機会になりうるのではなからうか。

例えば、『大和』の授業の後でも良い。『源氏』の後でも良い。前節の引用A-Dを適宜投げ込んでみてはどうか。『大和』や『源氏』の指導過程で、指導者は必ず「親子愛」について触れることにならうから、その上で『浜松』の事例を提示し、更に掘り下げさせるのだ。親とはどういうものか、子とはどういうものか、これまでの、そして、これからの自分の問題として思索させるのである。言うまでもないことだが、高校生活が進めば進むほど、社会との関わりが、現実的なものとして学習者一人ひとりの身に迫ってこよう。進学するにせよ、就職するにせよ、近い将来、学習者たちは必ず社会に巣立たねばならない。だからこそ、独り立ちの前に、今の自分の拠って来たところ、あるい

のお返しのの漢詩は、雲の浪、煙の浪を越えて遙か遠くの唐まで「父宮」を尋ねて海を渡って、前世を隔てて、姿形を別人に変えなさっているけれど、しみじみ慕わしく、ふるさと日本を恋うる心もたちまちに忘れてしまったという趣旨のものを作ってお見せ申し上げます。皇子も涙を我慢することができなさらぬい。

二 浜松中納言物語の教材価値

新課程用の検定教科書を一瞥してみる。「親子愛」について描いている教材はどれくらいあるだろうか。

物語作品で言えば、まず目に付くのが『大和物語』の、いわゆる「姨捨」の一節であろう⁷。周知の通り、一時は失いかけた親への情愛を改めて取り戻す子の姿が感動的な短篇であるが、ほぼ全ての教科書会社が、何らかの形でこの一節を採録している。無論、厳密に言えば、ここに登場するのは実の親子ではないが、「親は死にければ、をばなむ親のごとくに」(三九一頁)⁸とあり、実の親子同様と見なして良いだろう。子の愛が親を遺棄から救ったストーリーとまとめられよう。

次に目に留まるのは、『源氏物語』の、明石御方と明石姫君の子別れの一節であろう⁹。娘のより良い

未来を願い、敢えて我が子を手放す明石御方の哀切さが胸を打つ場面である。親の愛が、入内という娘にとつての輝かしい将来を呼び込んだストーリーと言えよう。

『うつほ物語』の俊蔭女と仲忠の母子愛について取り上げている教科書もある¹⁰。そもそも、『うつほ』自体、旧課程用の教科書には採録が見られなかった作品であり、『うつほ』の教材価値¹¹を重視している私としては、望ましい傾向だと考えている。この点からも、また本稿の趣旨からも、同教科書と編集者の見識は高く評価されるべきと思う。

物語以外に目を転じてみる。日記作品では、『土佐日記』の「忘れ貝」、「羽根」等、亡児についての一節¹²、あるいは、『更級日記』の継母との別れの一節¹³が該当しよう。随筆として、『おらが春』の、いわゆる「添へ乳」の一節を採録するものもある¹⁴。無論、和歌についても、全てを細かく見ていけば、『万葉集』の「防人歌」を例示するまでもなく、「親子愛」を詠んだものはいくつも見つかるだろう。

このように、教科書に「親子愛」を描いた教材は、決して少ないわけではない。しかし、いかがである

ある。ここまで述べ来たった「親子愛」の深い交流が描かれている。傍線部、かつての容貌とは異なるにもかかわらず「父宮」その人と確信する中納言の心性や、また、点線部、周囲に悟られぬよう、再会叶った万感の思いを、互いのみそれと分かる漢詩に託し合って涙する二人の姿には、饒舌になりえない分、かえって静かにこみ上げる愛情の強さが見て取れるように思われる。私たちの心を揺さぶる名場面として、読み味わわれねばならないだろう。

D 皇子（＝「転生」した父宮）の御消息あり。かぎりなくうれしくて（中納言は）参り給へり。ところのさま、ほかよりもいみじくめでたく、水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢のけしきもいみじうおもしろし。こなたに召し入れたり。御年七つ八つばかりにて、うつくしうて、うるはしく鬢づら結び、しやうぞきておはす。ありし御面影にはおはせねど、あはれに、さぞかしと見たてまつるに、涙もこぼるる心地し給ふ。皇子も御けしきはりて、おほかたのことも仰せられて、言葉にはのたまはで、昔を忘れぬに、かく逢ひ見つるよ

しのあはれを書いて賜はせたるに、いみじう念ずれど涙とまらず。その御返し文、雲の浪煙の浪と、はるかにたづねわたりて、生を隔て、かたちを代へ給ひつれど、あはれになつかしく、ふるさとを恋ふる心も、たちまちに忘れぬる心を作りて見せたてまつるに、皇子もえ堪へ給はず。

（巻一 三四―三五頁）

〈訳〉皇子から中納言へお便りがある。この上なく嬉しく中納言は参上なさった。お住まいの様子は、他よりもたいそう素晴らしく、水の色合い、庭石のたたずまい、庭の正面、梢の様もたいそう趣がある。皇子は御座のほうに中納言を召し入れた。皇子のお歳は七つ八つほどで、かわいらしくて、美しく鬢づらを結って、正装をしていらつしやる。生前の「父宮」の面影ではいらつしやらないけれど、しみじみ感動し、この方こそ「父宮」だと拝見すると、涙もこぼれる心地がしなされる。皇子も表情が変わって、並一通りののこなどをおっしゃって、言葉ではおっしゃらず、親子であった昔を忘れないので、このように再会した旨の感動を漢詩に書いて中納言に下賜なさったので、中納言はたいそう我慢するけれど涙が止まらない。それに対する中納言

なお、Cの波線部、「父宮」は「唐后」に中納言を疎ましく思わないよう請願する。自身の中納言への愛情ゆえ、唐后の中納言への応対にも相応の親密さを求めるのであるが、これが中納言と「唐后」との恋の契機にもなっていく。即ち、「父宮」の中納言への情愛は、中宮と「唐后」の恋を起動させ、そのことが、引いては、前に「②唐后が異父妹吉野姫君の娘として生まれ変わる」と述べたとおり、物語中ふたつ目の「転生」を必然化しもするのだ。この「父宮」の情愛が、『浜松』に描かれる二つの「転生」の、いずれも源として機能していることは注目に値しよう。

戻ろう。さて、このように見てきたとき、『浜松』に「転生」という「荒唐無稽」なモチーフが成立しうるのは、中納言から「父宮」への「卓越した『孝養』心、及び、『父宮』から我が子中納言への『強力な『情愛』の念』が両立するゆえ、言い換えるならば、中納言、『父宮』相互の親子愛が揺るぎなく併存するゆえであることが知られる。親の愛と、それに感応する子の愛によって、確かに「転生」というモチーフは、この物語を展開する力としてありうる、ということなのだ。

だとすると、私たちが『浜松』に見て取るべきなの

は、「転生」という事象そのもののみならず、それが極めて深い「親子愛」によって可能になっているという事実なのではないか。極めて深い「親子愛」の、最も顕著な物語徴表として、「転生」が『浜松』に選び取られているという事実なのではないか。「輪廻転生や仏方便を構想のかなめにすえるのは、これほどの規模をもって生をとらえないかぎり人間を描ききることではできない」という認識をはじめとする、作者固有の思想——作者における世界観と物語の方法との出会いと——言いかえるとよい——にもとづくのであろう」⁽⁵⁾と早くに指摘されているとおり、この「転生」は、「人間」のありかたを「描ききる」ために必然化した「作者固有の思想」なのであり、「作者固有」の「物語の方法」なのであろう。そうあってみれば、この「転生」を成立させる力たる「親子愛」こそが、『作者固有』の「物語の方法」を支えていることになりはしないか。少なくとも「①主人公中納言の父宮が唐の第三皇子として生まれ変わる」展開に関わっては、斯くの如く、「親子愛」を「描ききる」かたちとして「転生」を捉えるべきなのである⁽⁶⁾。

次に引用するDは、中納言と「父宮」再会の場面で

三皇子でもある「父宮」は、その母「唐后」に次の通り、事の真相を語る。

C

…みづからは日本の人にてなむはべりし。この中納言、前の世の子にてはべりき。ただひとりはべりしかば、たぐひなくかなしく思ひはべりしにより、九品の望みもこの思ひに引かされて、かく生れまうで来たるとなむおほえはべる。中納言も、かくなむはべる、と伝へ聞きて、おほやけもかぎりなく惜しみ、母も命絶ゆばかりかなしみけれど、なほふり捨てて、三年がいとまを申して渡りまうで来たるなり。されば、知らぬ国の人をうちつけに親しくむつび思ふやうにも、とぞ人も思ひはべらめども、昔の心おほえはべるにより、つねに見まほしく、あはれにおほえはべるを、御心にもうとくなおほしめしなさせ給ひぞ。…

(巻一 四九〜五〇頁)

〈訳〉…私は日本人でした。この中納言は、私の前世での子でございました。私の子はただ一人だけでしたので、

この上なくかわいく思っておりましたことが原因で、極楽往生の望みもこの情愛に引かされて、このように

〔唐の皇子として〕生まれてまいつたのだと思われます。中納言も、私がこうして唐にいると伝え聞いて、日本の帝も中納言の離日を限りなく惜しみ、母も命が絶えるほど悲しんだのですが、それでも振り切つて、三年間の暇をお願い申し上げて渡唐しここに参上しに來てゐるのです。だから、知らない国の人を、いきなり親しく睦まじく私が思うようにも、と人は思うようですけれども、親子であつた前世の情愛が思われますので、いつも会いたくて、しみじみと思われますので、あな た(=唐后)のお気持ちとしても(中納言を)疎ましくお思ひになりなさいで下さい。…

注意したいのは、二重傍線部「この中納言、…」の所だ。「父宮」は、中納言をこの上なくかわいと思ふがゆえに、極楽往生の望みすら捨てて「転生」を果したという。いわば、自身の幸福な往生さえも顧みないほどの、子への強い思い入れが「転生」を可能にするファクターだったということだ。つまり、死後においても変わらず我が子に向けられる強力な「情愛」の念が、そもそもこの物語の「転生」を生み出しているのである。この点をふたつ目に確認しておく。

めた「暁」の宰相中将の詠歌に「思ひもかけぬ浪の音かな」とあるのだから、この直前には、宰相中将に対する中納言の決意表明があったことになる。つまり、中納言は、「夢」を全く疑うこともなく、「父宮」の唐土での「転生」を、ただちに信用したのだ。

夢告の信憑性を、現代と同じ尺度で捉えてはなるまいが、それにしても「渡唐」は、決行を即断するには、Aで見たとおり、あまりに「恐ろし」く困難な旅だったはずである。加えて、時に主人公は「中納言」の要職にあった。長期に亘り職を空けることは憚られようし、ましてや、万が一にも客死などということになれば、本人、政界ともども取り返しつかない大事態である。にもかかわらず、中納言は「暁」には「渡唐」を決定しているのだ。

これは、信じがたい事象すらも即座に受容できるほど、父との再会を希求する心が強かったからだと考えねばなるまい。いわば、父への愛着の強さが、事態の不審さを即刻凌駕したわけだ。中納言の、ひとえに父を慕う孝心の強さが、この決断の早さに反映していると理解されるのである。だからこそ、Aの傍線部で「孝養のころさし深く思ひ立ちにし道」と定位されるの

であろうし、それを称揚するかのごとく、Aの点線部では「荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る」という、「孝養」に感応した奇瑞めいて、予想に反した旅の平穩が描かれるのであろう。また、だからこそ、Bの後にも『無名草子』は、「式部卿の宮、唐土の親王に生れ給へるを伝へ聞き、夢にも見て、中納言、唐へ渡るまではめでたし。」(七八頁)と、再び賛辞を送るのであろう。

そうあってみれば、「荒唐無稽」に見える「父宮」の「転生」は、中納言の卓越した「孝養」心があつてこそ実現可能なモチーフだということになりはしないか。いわば、「転生」を現実として受け止める存在があつてこそ、物語に「転生」が成り立つというわけだ。不可思議な事象すらも一意に信賴し、受容し、行動する子中納言の存在が、「父宮」の「転生」というストーリーを、『浜松』の独自世界として成立させうるのだという点、まずひとつ確認しておこう。

翻つて、「転生」する側である「父宮」について見ておこう。中納言の「渡唐」を受け、後にDとして引用するとおり、「転生」した「父宮」と中納言との再会が遂に果たされる。その後の場面であるが、唐の第

A

孝養のころろざし深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺といふところに、七月上の十日におはしまし着きぬ。

(巻一 三二頁)

〔訳〕父への孝養の志が深くて思い立ってしまった旅路だからであろうか、恐ろしくて、遙かに遠いと思いを馳せた海の旅であるが、荒い波風にも遭わず、思い通りの順風が特別に吹き、舟を送る心地がして、唐土の温嶺という所に、七月上旬の十日に到着なさった。

中納言が「渡唐」に際して「恐ろし」さを抱いていたことが窺えるが、それでも傍線部、深い「孝養」心ゆえか、点線部、波風まで味方するごとく、大過なく「渡唐」が叶ったという。つまり、ここに至るまでの諸々の顛末が、現存『浜松』には欠けているわけであるが、その概要については、鎌倉期、藤原俊成女が著したとされる『無名草子』の次の一節によって窺い知ることができる。

B

父宮の、唐土の親王に生れたる夢（中納言が）見たる暁、宰相中将尋ね来て、

独りしも明かさじと思ふ床の上に

思ひもかけぬ浪のおとかな

と言ふよりははじめ、唐土に出で立つことどもいと
いみじ。

(七四〜七五頁)④

〔訳〕父宮が、唐土の（第三）皇子として生まれ変わった夢を中納言が見た暁、宰相中将が訪問して、

恋人のあるあなたがひとりて夜を明かすことはある

まいと思いましたが、

そのあなたから思いがけない唐への海旅の決意

を聞いたことよ

と云うことをはじめ、唐土に出立することなどはたいそう素晴らしい。

主人公中納言が、「父宮」故式部卿宮が「唐土の親王」に「転生」した夢を見たため「渡唐」を決行するというストーリーが、元の首巻にあったことが知られる。ここで注目したいのは、中納言がその「夢」を見た「暁」には、既に「渡唐」を決意していたという事実である。いかにも早い決断ではないか。「夢」から覚

る。特に後者など想像も容易ではなからうし、高校生の現実からは、確かに乖離の感否めまい。

また、藤原定家自筆の、いわゆる御物本『更級日記』の仮名奥書、「よはのねさめ みつのはま、つ（＝浜松）の別称） みつからくゆる あさくら などはこの日記の人のつくられたるとぞ」との識語は、定家と菅原氏嫡流の為長との文学的関係の観点^①、あるいは、『浜松』と『更級』との語彙の重なりや、『浜松』所収歌と『続古今集』孝標女歌との重なるの観点^②等、様々な観点から、少なくとも『浜松』に関しては信用に足るとされる現況においては、これもまた「安定教材」である『更級』との作者の重複が、敬遠の要因になるのかもしれない。他にも、首巻の散佚による全体像の不透明さも問題の一つとして考えられるところではある。

しかし、である。これら諸問題は確かにあったとして、もし、それゆえにこの物語が高校現場で披瀝される機会を失っているのだとすれば、それはいかにも現場にとって惜しまれることと言わざるを得まい。『浜松』には、高校の授業で扱うに相応しい重要な要素が含まれているのだ。以下、この点について、節を改め

述べることにする。

一 転生と渡唐と親子愛

前に触れたとおり、『浜松』には「渡唐」と「転生」が描かれている。いずれも『源氏』になかったモチーフであることが、この時期の物語の置かれた状況を示唆してもいようが、ともかく、唐に限らず、外国を舞台に取り込む趣向は、既に「うつほ物語」にもあるため、物語文学史上に占める『浜松』の顕著な特徴として、この「転生」を初めて大きく扱ったことをまず挙げて良いだろう。

さて、物語中に言われる「転生」は二つ。ひとつは「①主人公中納言の父宮が唐の第三皇子として生まれ変わる」というものであり、もうひとつは「②唐后が異兄妹吉野姫君の娘として生まれ変わる」というものであるが、本稿で特に注目したいのは前者である。これも前に触れたが、『浜松』の本来の首巻は散佚しており、現行の巻一^③は、主人公中納言が、「転生」後の父を追って「渡唐」を果たした場面から始まっている。本文を引用し、私に現代語訳を付しておく。

浜松中納言物語の教材価値

中井賢一

はじめに

高等学校国語科においては、平成二十五年度より新教育課程が実施されている。大半の高校では、「国語総合」、「古典B」あるいは「古典A」とカリキュラムを再編成した上で、古典の学習指導を進めていくことになる。それに伴い、検定教科書についても、新課程用のものへと更改されたが、それらの所収教材名を一瞥しても、『浜松中納言物語』を採録するものは皆無である。もともと、前年までの旧課程に基づく検定教科書においても採録はなされておらず、『浜松中納言物語』が、長期に亘り、教材として重視されてこなかった事実が知られる。

もちろん、その背景には、『浜松』の成立時期の問

題もあろう。この物語は、平安後期成立で、近接する平安中期には『源氏物語』が成立している。『源氏』が、物語教材としての不動の位置を占める、いわゆる「安定教材」であることは、成立時期を接する『浜松』にとっては不利と言えよう。通史的な観点からも、教材として扱うメリットがさほど感じられないという懸念はあったと思われる。

あるいは、『浜松』の作品内容の問題もあろう。周知の通り、この物語は日本だけでなく唐にまで舞台が拡散する（＝主人公や唐后などの渡唐）し、また、主人公を取り巻く人物たちが、他の人物へ生まれ変わって主人公に再会する（＝主人公の父と唐后の転生）という、荒唐無稽とも言われかねない展開を有してもい